

Ⅲ 学習成果の活用と実践

【実習先：山形県鶴岡市 つるおかユースホテル】

報告：佐原多恵

第7章 地域の魅力発見・発信に寄与する学習活動

ー現場の人々と分かち合える学習実践を求めてー

キーワード 食事 出羽三山 庄内平野 学習支援者とコミュニケーション



つるおかユースホテルは海辺の近くの美しいブナの原生林「気比の森」の中にある。

地域紹介 - 自然豊かな山形県庄内平野とつるおかユースホテルー

庄内平野は、日本海と出羽三山に囲まれた自然豊かなところで、つるおかユースホテルも原生林の一角にあります。地域の自然・文化をいかした体験プログラムが用意されていて、ここならではの活動ができます。自然と文化豊かな魅力的な場所です。

実習概要

4泊5日の日程で行いました。朝は食事や自然についての対話、日中から夜にかけて鶴岡市、またその周辺地域の観光や社会教育関連施設へ見学に行きました。写真を撮ったり、資料を見たり、その場所についての話を聞いたりして、成果報告用の資料を集めました。

写真：実習で訪れた庄内地方の歴史・文化遺産



山居倉庫（酒田港に面した歴史ある米蔵）



酒田の大地主だった本間氏別邸の庭園

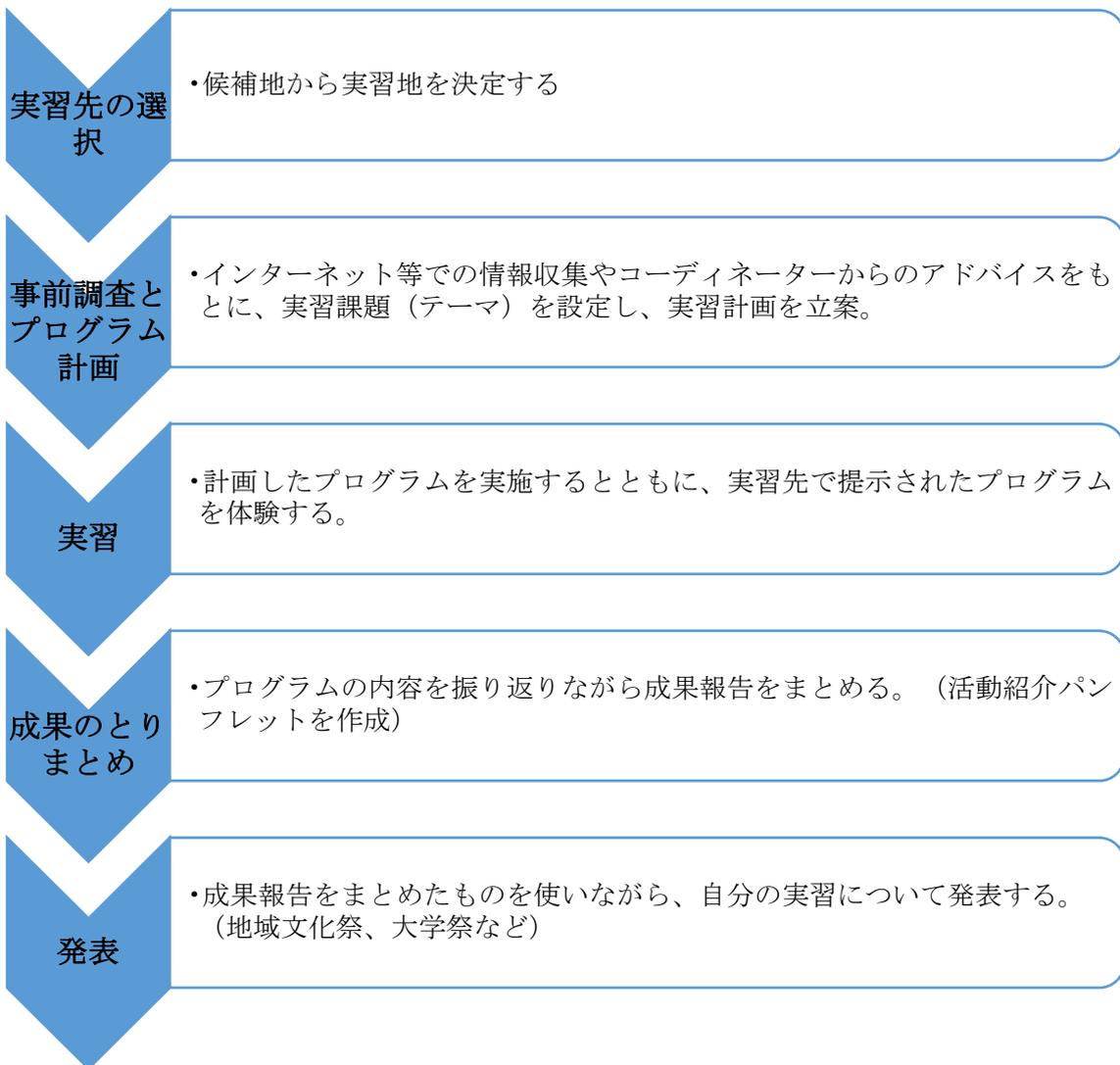


鶴岡市加茂水族館はクラゲの展示「クラネタリウム」で有名



明治維新後鶴岡藩士たちが開拓した松ヶ岡開墾場

実習のプロセス



1. 調査実習の背景—0からのスタート—

実のところ、当初の実習活動で特にこれを知りたいとイメージを持つことができませんでした。実習先となったつるおかユースホステルは、自然豊かで庄内平野の食文化も体験できる場所です。しかし、都会で育った私としては、小さい頃にガールスカウトに所属してはいましたが、ボランティア活動や地域貢献活動が主で、自然にも食文化にも強い関心を持っていたかという点、必ずしもそうではありませんでした。

しかし、実習するからには目的や課題を考えなければと思い、大学で勉強している「雑誌制作」をもとに、実習先のパンフレットを作ることをゴールとして、実習の計画を立てました。パンフレットは、読者に対して掲載された場所の魅力を伝えるとともに、制作過程において、掲載される側が、自分たちの新たな魅力を発見できる力を持った媒体だと考えています。現代において、紙媒体のメディアは衰退気味ではありますが、確実にアプローチできるのは、手に取ることのできるものだと考えています。

2. 準備—情報収集での苦勞とパンフレット制作の構想—

授業内で実習先についてインターネットで情報収集をしましたが、特にヒットせず、記述あるホームページを見ても3年前の記事、「現時点では営業を停止している」など本当に実在するのかわかりませんでした。コーディネーターの先生は、つるおかユースホステルを経営しているペアレントの方と連絡を取り合っているため「営業していることには間違いはない」と確信を持った表情で私に言いましたが、半信半疑でした。後日、実習前の巡回から帰ってきた先生に写真を見せてもらい、今も営業を続けていることがわかりました。しかし、実習先や施設がある鶴岡市についても情報を十分に収集することができず事前調査としては甚だ心もとないものとなってしまいました。実際には、インターネットに情報が載ってなくても地域活動団体・生涯学習関連団体など個別の取り組みが存在しています。電話取材や資料を取り寄せるなど、もっと様々な情報を集める努力ができなかったことが悔やまれます。

ただ、以上のことから、「手軽にアクセスできるような情報発信はされていない」という面があるのではないかと考えました。そして成果報告用として、実習先をPRするパンフレット制作を構想しました。実習先の取り組みの魅力をアピールできるようなパンフレットを作ることを目標とし、実習先とやりとりするための計画を具体的に立案することができました。

実習直前に、受け入れ先のペアレント（ユースホステルでは支配人を「ペアレント」と呼びます）と直接連絡をとりました。何時ごろ現地に着くのか、食事はどうするのか、必要なものは何か、など確認をとるために電話で話をしました。そこで、私は実習がスムーズに進むように、「成果報告としてパンフレットを作るので、つるおかユースホステルの魅力についてぜひ聞かせてください」とお願いしました。ところが相手からの返答は「パンフレットは必要としてないから作らなくていい」でした。実習まで数日も残さないところで、私の実習計画は白紙に戻ってしまいました。いったい何が起こったのでしょうか。急に計画を変更することは不可能です。これから行く5日間、私は何をして過ごせばいいのかわからなくなってしまいました。そんな絶望感のなか、実習が始まったのです。

3. 実践内容—地域の自然・文化・様々な学習資源との出会い—

(1) 現地調査—庄内地域の学習—

実習の5日間の日程は、鶴岡市と周辺地域に出かける現地調査がほとんどでした。

現地に到着し、挨拶を済ませてすぐに観光パンフレットを10冊ほど渡されました。その中で行きたいところを考えておくように言われました。翌日からのプログラムは、パンフレットの中で関心を持ったところを選んで訪問するというを行いました。

庄内平野を囲む出羽三山のうち、羽黒山と湯殿山へ行きました。羽黒山は、国宝である五重塔を見に行きました。時間の都合で本殿へ行くことはできませんでした。湯殿山は、入り口にある大鳥居が圧巻でした。本殿の参拝方法が特徴的で、ここでしか体験できないことだと感じました。この出羽三山は、山伏修行が定期的に行われるところで、山伏に関する博物館「いでは文化記念館」へ見学に行き、山伏について学びました。

鶴岡市は、城下町として栄えた文化があり、今でもそのころの建造物がたくさん残されています。致道館と致道博物館は、鶴岡の市民の暮らしの歴史について展示しているところで、特に致道館は教育に関する資料がたくさん残されていました。城跡もあり、その周りは公園になっていて、市民の憩いの場になっていました。公園の近くに図書館があり、鶴岡市の資料がよくそろっていて、知識をさらに深めることができます。

鶴岡市の周辺地域も、美術館や水族館、米蔵などの文化的に興味深いところがたくさんあります。港町酒田市にある山居倉庫は、酒田米穀取引所の付属倉庫として明治時代に建てられた倉庫で、今でも農業倉庫として使われています。二重の屋根のつくりとケヤキ並木が特徴的です。松ヶ岡開墾場は、明治維新のときに庄内藩士約3000人が刀を置き、荒れた土地を耕して桑の木を育てて蚕を飼い、絹糸を作った場所です。今でも絹や繭を使った製品を売っています。加茂水族館はクラゲが有名で、直径5メートルの巨大な水槽に漂うクラゲたちは幻想的で、観光バスも立ち寄る人気スポットです。本間美術館は国指定名勝の本間氏別邸庭園があり、展示してある美術品ともに見ごたえがありました。



写真1：湯殿山の大鳥居



写真2：旧藩校致道館

(2) 地域に根差した食事と健康を志向して—やまがた伝統野菜とマクロビオティック—

つるおかユースホステルの食事は、マクロビオティックを基本としています。マクロビオティックとは「玄米菜食」を原則とし、動物製品や小麦、砂糖、化学調味料を摂取しない食事法です。食事のバランスに独自の考え方を持っていて、食材に陰陽があり、そのバランス

をとることによって、体内の陰陽バランスを整えて体調を整えるようにしています。

マクロビオティックは日本発祥のもので、現在では世界に広がっています。ベジタリアンとの違いは、健康志向かどうかという点です。こうした食の活動に熱心に取り組んでいるユースホステルのペアレントからは「病気になった方も、マクロビオティックを導入して食と暮らしを見直すことで、健康を取り戻し、今でも元気に暮らしている」という事例を紹介していただきました。

料理に使う野菜は、国産の野菜、特に地元で採れたものを使うことにこだわっています。これは受け継がれてきた地域の特徴的な野菜の価値を見直していこうという「やまがた伝統野菜」の取組にも繋がっています。山形県行政も力を入れている施策の一つだということです。庄内地域では枝豆の一種のだだちゃ豆や、ネギの一種のあさつきなど、全国的にも有名な野菜があり、栄養価が高くておいしい野菜がたくさんあります。

つるおかユースホステルでは、地元で採れた野菜や地元で作られた食材を大切にしています。食事提供を通じて、人間にも優しく、環境にも優しい、地域全体が健康的になることを目指す活動を展開しているのです。

（３） 自然—ここにしかない豊かな環境—

庄内平野は山と海に囲まれた自然豊かな土地で、海岸沿いには漁港がいくつかあります。

夜になると、夜光虫と呼ばれる海洋性のプランクトンを見ることができます。夜光虫と呼ばれる所以は、物理的な刺激を与えることによって発光するからで、大型で軽く、風に流されて海岸に大量に集まると、キラキラと美しく光り輝きます。

山の方に行くと滝や、湧き水、樹木など



写真 5：湧水



写真 6：玉杉



写真 3：夕食



写真 4：朝食

のスポットがあります。湧き水は飲み水として利用されているのに加えて、パンやごはん、そばや酒などの調理にもよく使われています。玉杉と呼ばれる大きな杉の木もあり、そこに歴史や、自然の強さなどを感じることができました。

4. 苦勞と成果—残された課題と今後の展望について—

(1) 実習成果—挫折と振り返り—

さて、当初企画していたパンフレット制作についてですが、受け入れ先施設に話を幾度も持ちかけましたが、全て遠回しに断られてしまいました。結局、実習の中では私が取り組もうとしていたパンフレット制作は、何も進展させることができませんでした。実習内容も周辺地域の現地訪問ばかりとなってしまう、肝心のつるおかユースホステルのことはよくわからないままになってしまいました。また、現地訪問もあいにくの雨天の日がおおく良い写真が撮れず、当初私が思い描いていたような成果報告をとりまとめることが絶望的となってしまいました。

大きな失敗の原因は、実習先と私がやりたかったことを、調整することができなかったことだということに気づきます。パンフレット制作について5日間もトライし続けたのに少しも受け入れてもらえなかったのは、やはり事前調査の不足や実習先とのコミュニケーション不足に原因があるのではないかと反省させられます。このようなフィールド実習で大切なことは、やるべきことややりたいことを明確化するだけでなく、実習生と実習先ともにそのことについてよく理解しあえるようにしていくプロセスではないかと思います。その最初の一步を踏み外してしまうと、今回のようなミスマッチを起こしてしまうのかもしれない。

(2) 学習成果—社会教育・生涯学習論の学びを振り返って—

確かに目標(実習経験を基にしてパンフレットに取りまとめること)を達成するという点では、今回の実習はあまりうまくいかなかったと言えるかもしれません。しかし、そのような結果になったからこそ、今まで社会教育・生涯学習について自分に理解が足りていなかったことがわかりました。今回の実習経験で、社会教育・生涯学習論において、以下の3つの観点を学ぶことができました。

1) 生涯学習施設としてのユースホステルの役割

ユースホステルは外から来た人と、自然・文化・歴史などの学習の場を「つなぐ」役割を持っています。実習では、現地調査として様々な場所に行きました。それらはユースホステルのペアレントが、ユースホステル利用者(つまり学習者)と学習の場をつなぐ機能を果たしていたからだと言えます。確かにユースホステル自体も学習の場になりえますが、ユースホステルは、学習者の窓口として大きな機能を持っていることがわかりました。

2) 学校教育と社会教育の相違点

社会教育は、学習内容に規定があるわけではありません。学校を想定した教育とは内容が大きく違うこともあり、戸惑いがちです。また、地域に関する学びを生涯学習的な立場で行おうとすると、難しいこともたくさんあります。ここで重要なのは、相手の思いやニーズを把握し、寄り添うことです。相手がどのような考えを持ち、自分に何を伝えたいのか。まず

は地域の学習主体・活動主体に寄り添う視点を持つことで、コミュニケーションがスムーズに始まり、様々な情報を引き出すことができるのではないのでしょうか。

3) 実習で考えた生涯学習の本質の一端—実習者と実習先の学びの関係性—

司書や学芸員、教職員の实習と社会教育主事の实習は大きく違います。学習支援者という立場は変わらないと思いますが、特に学習者が求める内容が多種多様であるのが社会教育主事ではないかと考えます。したがって自分が支援しようとする学習者から学び、学習者と共に新たな学びを創出することに取り組むという姿勢が求められると思います。

教える—教わるという立場だけでなく、互いに学びを深めていくプロセスを大事にしなが、活動をよりよくしていくための協働方策を模索しあうことが大事なのではないかということを痛感しました。

(3) 実習先をよりよく知るために—対外アプローチの必要性—

実習でお世話になったつるおかユースホステルは、豊かな環境、健康面に配慮した食事など、そこにしかない、そこでしか体験できないことがたくさんあります。しかし東北の震災以降、観光客は減り続けています。実習活動を通じて対外アピールのパンフレットを構想した理由の一つは、その魅力をぜひ多くの人たちに伝えたいという思いがあったからでした。一方で、ペアレントの方は、メディア、特に宣伝のようなアピールをあまり好んでいません。「ここに魅力を感じて、真に理解できる人は自然と集まってくる」と話してくれましたが、やはりそのような人々も含めて、きちんと情報を届けるという意味でも適切な情報発信も必要ではないかと私は考えています。私の学んでいる出版・編集という分野でこのような取り組みを、現場の活動者の想いを汲みながら、どのようにアプローチできるのか、引き続き考えを深めたいと思っています。

(4) 今後の展望—施設の活動と学習の価値を広げていくために—

私としては、今回の実習先施設であるつるおかユースホステルのような活動に対して、心の底から惹かれるような人に、適切な学習情報を届ける活動をすることによって、施設の活動と利用者とのマッチングを、より促せないものだろうかと思っています。地元の利用者は安定しているようですので、地元以外でもぜひこの取り組みの価値に共感する人々を増やせられるといいと思います。

具体的には、学習観光の拠点としてユースホステルをすすめたり、ユースホステルの取り組みの価値を伝えられるような資料を作ったりして、今までつるおかユースホステルを知らなかった人に伝える活動、学習窓口につなぐ活動を、社会教育主事の立場から進めていく方法もあるのではないかと考えます。

後日、実習経験を基に試みにパンフレットを製作してみました（次ページ掲載資料参照）。表紙に大きく載っている写真はつるおかユースホステルに入っすぐのロビーの写真です。つるおかユースホステルは建造物としてはとてもユニークな形をしていて、ロビーの吹き抜けを取り囲むように客室があります。その客室は階段状になっていて、同じ高さにある部屋が90度回った対角の部屋しかありません。階段だらけです。中のページには、観光についての案内を掲載。昼に行く場所、夜に行く場所、食事について載せています。裏表紙には、つるおかユースホステルへのアクセス、基本情報を載せています。

5. まとめ—地域に「寄り添い」学んでいくということ—

今回の実習は、私にとって反省点が多く、社会教育主事になるために適切に取組めたかどうか、自分の中では結論が出ていません。社会教育主事は、様々なことに興味を持ち、調べ、知っていること、そして何より大切なことは「教える」だけではなく、他者から学ぶ、学習者から学ぶという姿勢だと思います。ですから社会教育主事になるために、自然体験を必ずしなければいけないわけでもなく、まずは自分のできることから始めていけばよいのだし、もし自分のできることが相手とマッチングしていないのであれば、相手が必要とする人材を紹介し、つないでいくことができればいいのではないかと考えます。無理に自分だけで解決しようとしても、うまくいかない結果となるのではないかと思います。パンフレット制作しか計画をしていなかった私自身の実習経験で、それが痛感させられます。

また、実習先の考えに自分が寄り添っていく意識を持たないと自分の学習にもなりません。社会での学習活動の中では自分の人生の中になく考え方や、自分では受け入れにくい考え方も相手と関わることが多いのではないのでしょうか。そこで、自分を閉じてしまうのではなく、相手から様々な知恵や価値を引き出すつもりで寄り添っていくことが必要になるのではないのでしょうか。

そうしてコミュニケーションをうまくとらないと、相手から拒絶されてしまうかもしれません。これでは、お互いに学習を進める上で雰囲気が悪いものになってしまいますし、効果のあがらないものとなってしまいます。地域社会で学ぶ上で大切なことは相手を良く知ることではないのでしょうか。「寄り添う」ということについてふれましたが、それと似ていると思います。短い期間では相手を深く知ることは難しいですが、ここで手を抜いてしまうと、お互いを理解できず、知識や技術に満足しても、本当の学びにつながらないような気がします。

私自身、相手に寄り添い、互いに学習しあう考えをもって今回の実習を行えていたら、パンフレット制作よりももっとつるおかユースホステルに合った対外的なアプローチ方法を見つけることができたかもしれません。

最後に余談となりますが、今回の実習で関心をもったことの一つに、山形の伝統（伝承）野菜があります。やまがた伝統野菜は、研究がかなり進んでいて、本が何冊か出版されているようです。こうした実習の学びで得た一コマも貴重なものとして受け止めて、大切にしていきたいと思います。

つるおかユースホステル に泊まりませんか？

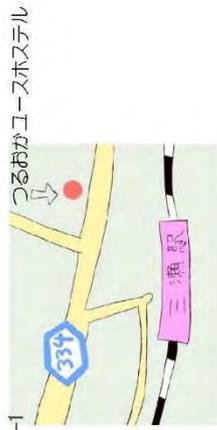


Information

つるおかユースホステル

〒999-7463

山形県鶴岡市三瀬宮の前 1-1



○施設概要

収容人数：52人

チェックイン：16:00～21:00(夕食予定者は19:00まで)

チェックアウト：5:00～10:00

休館：臨時休館あり

○料金

標準料金 会員 本体価格 2600円(税込価格 2808円)

一般 本体価格 3200円(税込価格 3456円)

食事 朝 本体価格 500円(税込 540円)

夜 本体価格 1000円(税込 1080円)

特別食 本体価格 2000～3000円(税込 2160～3240円)

○アクセス

JR羽越本線三瀬駅より徒歩15分

または鶴岡駅よりバス(瀧海行) 鶴岡ユースホステル前下車、徒歩5分

ユースホステルとは？

ユースホステルはドイツで生まれ、その歴史は100年以上。約80の国と地域に4000か所以上の宿泊施設があり、日本には北海道から沖縄まで約220か所のユースホステルがあります。

つるおかユースホステルは、山形県鶴岡市にある自然豊かなユースホステルです。ここではマクロビオティックの食事を提供し、自然と共に生きることを大切に考えています。

鶴岡公園周辺

鶴ヶ岡城の跡地になつて
いる鶴岡公園、藩政だった敵
道館など、鶴岡の歴史を感じ
られるところです。近くに市
立図書館もあり、鶴岡の歴史
に興味を持ったならなこと
を知ることができます。



↓ 致道館



加茂水族館・酒田エリア

美術館や水族館に行くのも
おすすめです。クラゲで有名
な加茂水族館、庭園がきれい
な本間美術館、歴史ある米の
倉の山居倉庫など、見どころ盛
りだくさんです。

↓ 加茂水族館のクラゲ



↓ 本間美術館「鶴舞園」



↑ 山居倉庫とケヤキ並木

夜の楽しみ

温泉施設が充実して
いて、お手頃価格で、一日の疲
れを癒すのにぴったりのス
ポットが多くあります。
また、夜光虫といつて、発
光性プランクトンがいる海
を見るのも次かせません。
夜の日本海にキラキラと光
る幻想的な光景は一度見て
おきたいものです。



↑ 夜光虫のイメージ図

↑ つるおかユースホステルの朝ごはん



朝ごはん

つるおかユースホステル
で食べる朝ごはんは、アクロ
バイオニックという玄米菜
食の食事でも健康的で
す。地元の野菜をたくさん使
ったご飯は、心と体を満たし
てくれます。



↑ 釜杉 (羽黒山)

↑ 羽黒山 五重塔

出羽三山

羽黒山 月山 湯殿山の三
つを合わせて出羽三山と呼
ばれます。修験道で有名な
山々ですが、国宝に指定され
ている五重塔があつたり、狐
を祀いで参拝するところが
あつたりと、修験道に詳しく
なくても魅力的な場所です。

↑ 玉杉 (熊野神社)



↑ 須賀の滝と橋 (羽黒山)

↑ 大清水 (湧き水)



自然に触れる

山、海に囲まれた庄内平
野は自然豊かです。山には
川に植物を支える大樹、山から
川に向かって美しい湧水が
絶えず流れ出しています。
ここでしか触れることので
きない自然が数多くありま
す。

【調査地：新潟県粟島浦村】 報告：阿部雄太 阿部ゆり 内田歩実 角田祐基 高橋咲紀
佐原多恵 花岡史悠 土方優紀 眞野聡美 幅野裕敬

第8章 粟島しおかぜ地域共生プログラムの構築研究

－島資源を活かした学習・ツーリズム・産品開発と首都圏連による雇用・定住促進策の検討－

キーワード：離島 地域づくり 参加協同の地域調査 学習プログラム開発 世代間交流



写真1：豊かな海と里山に囲まれた粟島の集落

地域概要

粟島浦村は人口 350 人余り、日本海に浮かぶ周囲 20km ほどの離島の村です。本土側からは新潟県最北端の市である村上市より汽船で 1 時間半ほどの位置にあり、澄んだ海と豊富な海産資源、かつては野生馬を育んだ里山の恵みが魅力です。西海岸は日本海の荒波に洗われた岩礁地帯となっており、まさに絶景と呼ぶにふさわしい風光明媚な景観が広がっています。

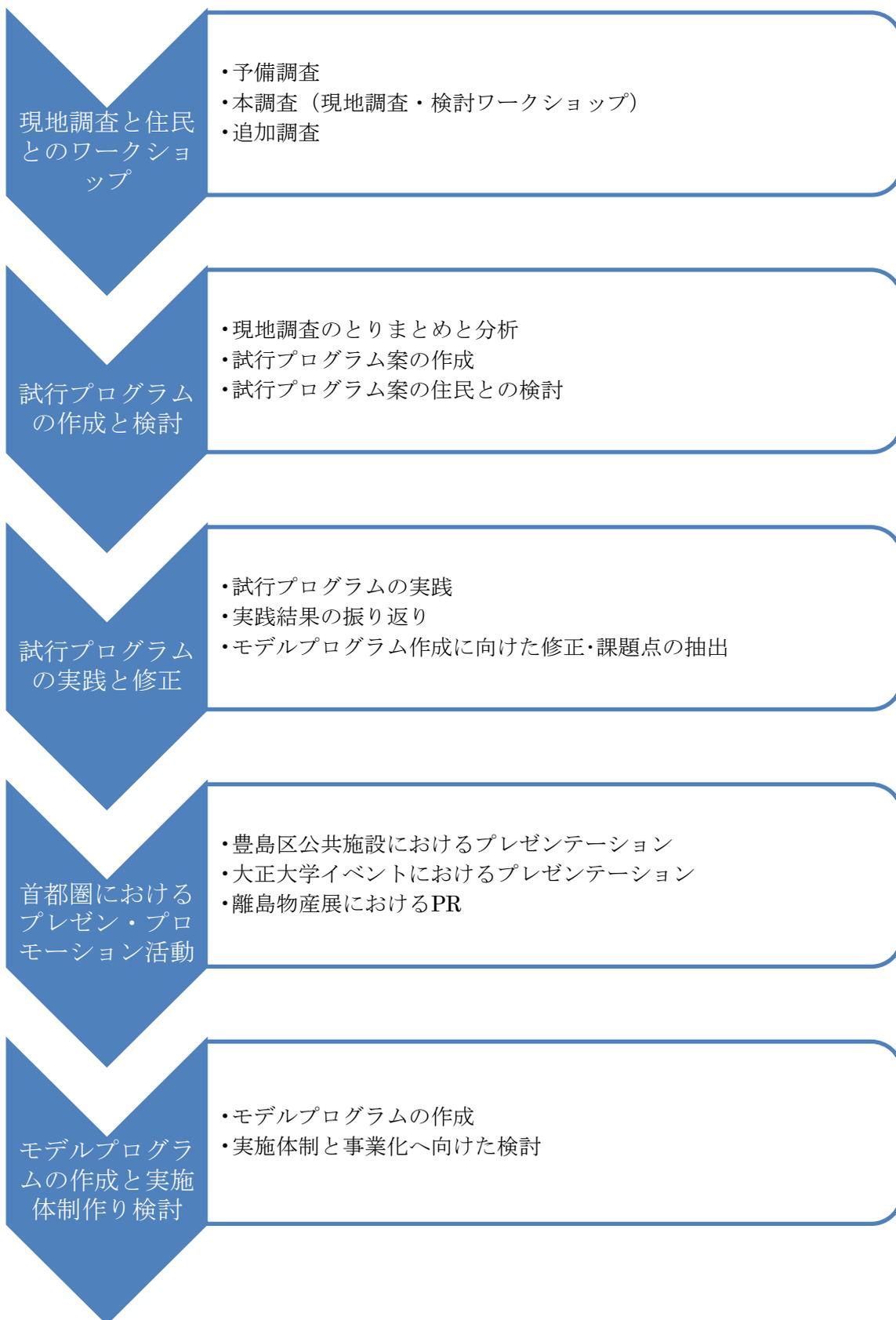
近年、過疎・少子高齢化が進んでおり島の人口も最盛期の半分以下となっています。人手の不足から島環境の劣化や里海における生業の低迷などが危惧されています。村では島外の子ども達を島の学校に受け入れる「しおかぜ留学」や島への移住促進につながる観光事業など、島外の人々との連携協働による人づくりと島の活性化を模索し始めています。そのため島民と島外者が協力して、島作りのために共に取組めるもの（こと）の掘り起こしが求められています。

活動概要

粟島浦村の自然・文化・人材資源を活用し、島外者が島内住民とともに取組むことができる島づくりプログラムの作成を行いました。プログラム作成のために島民と共に、①地域調査と調査に基づいた試行プログラムの作成、②プログラムの試行、③首都圏でのプレゼン・プロモーション活動、④事業化に向けた体制整備検討を行いました。

以上の結果、島内外の参加者が協働できるものとして、主に島の高齢者が担ってきた里山・農業、手仕事（民具づくり）、郷土料理、共同作業・年中行事に光を当て、これらを構成要素とした学習観光プログラムを構想し取りまとめました。

事業プロセス



1. 調査研究の目的

粟島浦村の自然・文化・人材資源を活用し、島民とともに島外者が取組むことができる島づくりプログラムを作成することを目的に、「島の潜在能力の再発見」「日常生活に依拠したプログラム開発」「『地域人』育成」「首都圏連携による活性化」を主要な要素として組み込んで、研究調査を進めました。

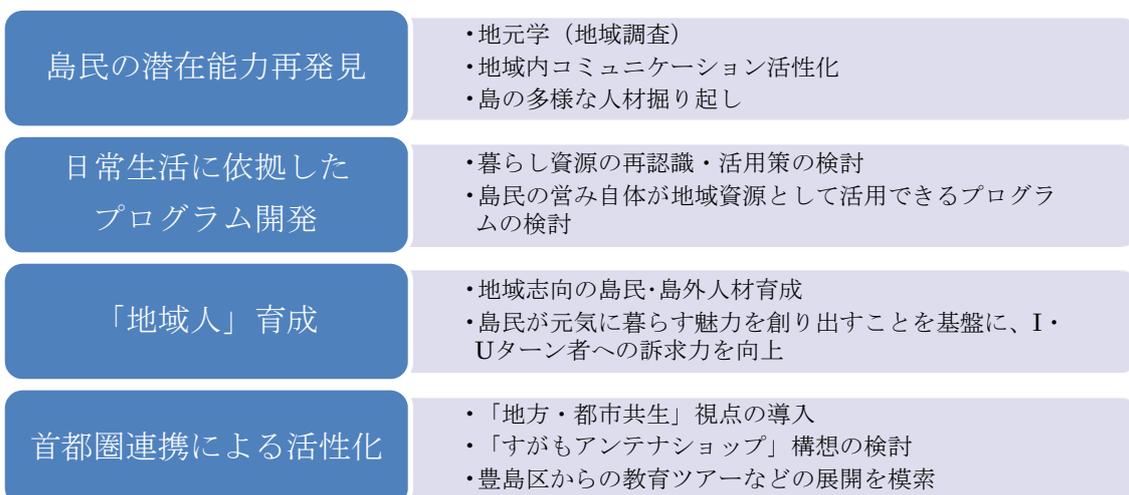


図1：調査研究の意図と構成要素

2. 調査研究の概要と方法

研究目的を達成するため、新潟県粟島浦村内浦集落及び釜谷集落をフィールドにして以下の調査研究を行うとともに、首都圏でのプレゼンテーションやプロモーションに資するPR活動を実施し、島づくりのモデルプログラムを取りまとめました。

- (1) 現地調査と住民とのワークショップの実施（実施期間：7月3日～8日、8月2日～8日、9月6～8日）

粟島浦村内浦・釜谷集落において住民と共に現地調査を行うとともに、調査結果を共有し活用するための検討ワークショップを実施。

- (2) 試行プログラムの作成と検討（実施期間：8月～10月）

調査結果を踏まえた島づくりに資する試行実践プログラムを作成し、関係住民と共に試行実践に向け検討。

- (3) 試行プログラムの実践と修正（実施期間：11月13日～15日）

試行プログラムを実践し、その有効性や課題について検証。

- (4) 首都圏におけるプレゼンテーション・プロモーション活動（実施期間10月～11月）

豊島区公共施設、大正大学イベント、離島物産展等において、本調査・研究成果をプレゼンテーションするとともに、作成したモデルプログラムのプロモーションにつながるPR活動を実施。

- (5) モデルプログラム作成と実施体制づくりの検討（実施期間12月～3月）

試行実践やプレゼンテーション結果を踏まえてプログラムを修正し、モデルプログラムとして取りまとめるとともに、その実施体制について検討。

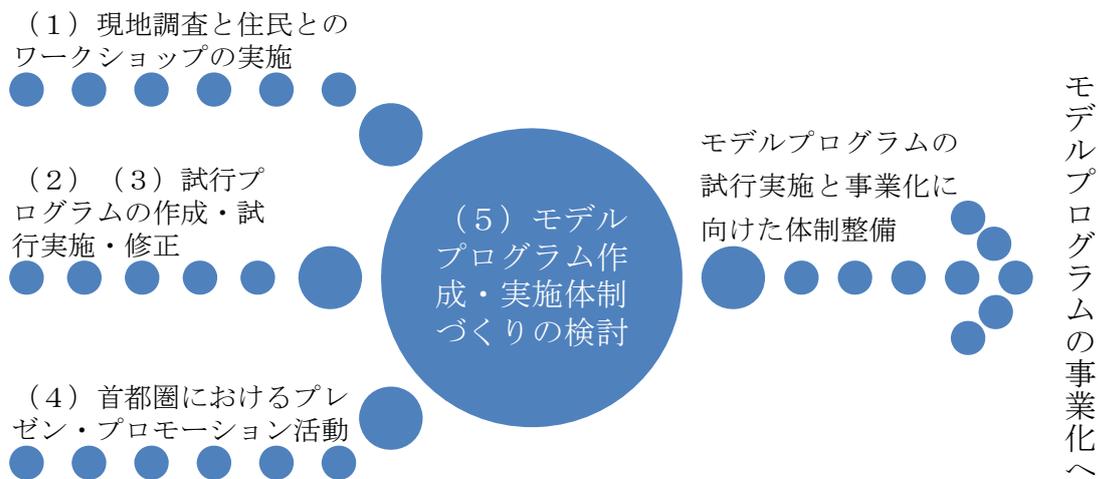


図 2：調査研究の方法とプロセス

3. 調査研究の実施

(1) 現地調査と住民とのワークショップの実施

粟島浦村内浦・釜谷集落において住民と共に現地調査を行うとともに、調査結果を共有し活用するための検討ワークショップを実施しました。都心から離島を訪れた私たちにとって、驚きと戸惑い、様々な感動がある経験となりました。

1) 粟島についての印象、都心との違いを実感

島に到着して最初に出会ったのは美しい海の景色です。とても綺麗で、まるで沖縄や小笠原のような色で島とのコントラストが抜群で感動しました。島は内浦地区と釜谷地区の二つに分かれており、山によって分断されています。移動手段としては、山を横断する陸路か、海から島外を周って行く海路の二つになります。都内での移動手段としては、基本的に車や電車という陸路であったため、海路で移動ということが新鮮です。島に到着したのはお昼の時間であるにもかかわらず、車や人の声はまばらで波や虫の音しかしないほど落ち着いた場所であると感じました。

一方で携帯電話の電波が悪く、スーパーは一つしかないため当初不便性を感じてしまいました。また、夏ということもあり虫（主にアブ）が大量に生息しており、同行した教員以外の学生メンバーの多くが慣れていないため苦戦を強いられました。

2) 島民の方との出会いと島資源に根ざしたコミュニケーションの工夫

港から歩いている際、私たちの服装や荷物から島外から来ていることがわかったようで「いらっしゃい」や「こんにちは」など積極的に声を掛けてもらいました。ただ、訛りが強いと聞き取れないことが多々あり、とくにお年寄りの方はその傾向が顕著です。言葉だけに頼らない、島の実物のもの・ことを活かしたコミュニケーションの重要性が実感されました。

3) 現地調査 - 地区をグループごとに分かれ地元住民の方と一緒に魅力や特徴を調査 -

①現地調査の様子

海、食、農業、里山に分かれて地域調査を実施しました。編成は一グループに学生が2～3名、地元住民の方が3～4名で取り組みました。

地域の方と一緒に歩くことで、地元の方にとっては当たり前になっていることも外部の人間からは魅力に見えることや特殊に感じるという発見をすることができました。調査前の地元の方たちは魅力なんて何もないと自信がない様子でしたが、実際に調査を始めると学生から都会にはないということや多くの発見がありました。また、地元の方からも「こんな伝説があるんだよ」ということや「ここは今廃れているが昔は使われてた」などの情報も出てきて、忘れていたまたは気付いていない魅力が多く再発見されました。



写真1：島の農地の作物について案内していただく

②収集資料の取りまとめも地元の方々と共に

調査後、夕刻から調査の取りまとめ作業（写真の印刷、資源カード整理、マップ作り）をおこないました。各グループが集めてきた資源カードと写真を地図に書き込むことで、どこに何があるのかをまとめました。できあがったマップを見て、地域の方から「そういえばここにはこれがある」や「こんなにいろいろあったんだ」といった新たな意見、驚きがありました。子どもの頃遊んでいたなどの昔のことを思い出し楽しそうな笑顔を咲かせていました。

自分たちで調べ、調べたことを基にして検討していくということを、地元の方々と共にこなしていくことの大切さを実感しました。



写真2：現地踏査で分かったことを地図に記載し確認

4) 漁業の様子を取材

①漁業分野における協働可能性の検討

集落周辺の調査のほか、私たちは島の漁業の現状を見せてもらうため、漁船に乗り、定置網漁を見学しました。漁業分野において島外者が共に出来る活動があるかを確認するためです。漁業の実態がどうなっているのかを確認することと、漁の様子を映像や筆記で残すということをおこないました。そのため、人員を撮影・記録・荷物の管理の3つに分けて取材活動をおこないました。

②取材の流れと内容

漁は早朝から行われるイメージが強いかと思いますが、今回見せていただいた漁もまた早朝からのものです。漁船が出る港は私たちの宿泊している施設がある釜谷地区ではなく、島の反対側にあたる内浦地区にあります。そこで公共交通機関等が確保できない早朝、宿泊施設からは徒歩で集落間を移動しました。街灯もなく、一台として車の通らない国道をひたすら歩くナイトハイクを楽しみながら、予定の時間よりも早く港に到着することができました。その後、漁師さんたちが到着し、船を出せるかどうかを確かめに行ってくださいました。少し潮の流れが速かったものの、無事出港し、私たちは漁場へと向かいました。船の上で漁師さんたちが準備をしたり、作業をしたりする様子を撮影したり、記録を取ったりした後、船は港へ帰ってきました。



写真3：漁船に乗って定置網(大謀網)漁を見学

③現地調査を行う上での留意点

調査をする中で難しかったことは、調査をさせていただく場において、そこで動いている方の邪魔をしないということです。当たり前のことのように思いますが、私たちは調査の対象となることに関して下調べはできても、基本的に経験できないことの方が多くなります。そのため、実際にその場に立ったときに人の動きを見てひたすらによけ続ける事しか出来なくなります。経験のない人間が現場で動く人の動きを予測することは難しいですが、対象の邪魔にならないよう調査することが重要です。

④事前調査・学習の重要性 - フィールドの細かなところまで気を配ること -

第1に、行き先のことは交通手段から歴史まで下調べしてから行った方がよいという点です。今回、下調べがあまりできていなかったために、私たちは徒歩移動になったり、バスを延々と待ったりすることになってしまいました。その他にも、地元の方々と話す上で、知らなかった、で済むことばかりであるとは限らないので、必ず下調べをしてから行くほうが良いと考えられます。

第2に、体調を万全にしておくという点です。調査は天候や周囲の環境がよいところで行われるとは限りません。どんな調査でも最後まで行えるよう、体調は万全にしておきましょう。移動が車や電車等であるとは限りませんし、今回のように船を使う場合もあります。そこで体力を使い切ってしまうのは元も子もありません。

第3に、準備は念入りにしておくという点です。下調べの大切さと通ずるところがありますが、想定できる事態には対応できるよう準備しておくことは大切です。街灯のない道を懐中電灯なしで歩かなければならなくなるかもしれませんし、移動手段は船かもしれません。今後の私たちの学習活動においても事前調査のための情報収集能力を高めるということが大きな課題だと痛感した経験となりました。

5) 情報共有のための発表会

①地域住民と研究調査背景を共有することの必要性を実感

グループごとに発見したことなどの調査結果の発表を行いました。その際、地域の方から、「調査をして何になるんだ?」と言った意見が出ました。この質問からも調査に協力していただく地元住民にとって、どういう目的があり、結果として何を求めることができるのか、それをどう活かしていくのか明確に示すことが重要だということが分かります。今回の調査は、外部者がかかわることができる島の営みの再生と元気作りにつながる活動の創出ということをテーマにおいています。そのためにまず都心の人と地元の人に関わることで地域の魅力（都心との違いにより）を発見する取り組みをおこなったわけですが、地域調査においてはこのような経緯を地元住民と共有しながら取り組んでいくことが大切だということを変更して学びました。

②島の里山・農業への着眼

当初、離島での取り組みはなんといっても海洋資源を活かしたものだというイメージがありました。しかし調査の結果、島の里山や農業の営みに光が当たる結果となりました。

それは、離島という環境でありながら粟島は水に恵まれているということへの驚きと関係します。島内の里山・畑の維持管理は、山菜、農産物だけでなく、その独特の地質構造とあいまって、豊かな水を育み、海の恵みを作りだしているからです。海の生業にかかわるには、定置網漁をはじめとして専門性が必要とされるため島外者では難しいということが明らかになりました。一方で、農業分野は、島外者にとって作り方が本島と共通するところが多く協働できるのではないかとこの発見がありました。また、畑の管理をしているのはおばあちゃんであり、すべてを手入れしきれていないのが現状となっており、島側にとっても参加誘引の要素が見られると考えられます。

③島の高齢者の「お手伝い」をテーマに里山・農業そして生活文化への着眼

島内資源のキーとなるフィールドとして里山と農地という結果になりました。そして、集落の伝統文化の担い手として、郷土料理・菜園作りと島内女性の役割に注目しました。これまで、外部者＝観光客という構図がありました。それを共に協働して取り組むことができる新たな外部者を新規開拓することをねらうことも期待できます。

島のお手伝いプログラムとして、畑の手入れ、里山の手入れ、山菜取り、郷土料理や民具作り、行事や共同作業等を外部の者と一緒に取り組むというプログラムを構想することになりました。



写真6：調査結果を住民と共有し、意見交換

(2) 試行プログラムの作成と検討

現地調査の結果、写真画像約 1000 枚、地域資源カード約 300 枚、地域資源を活用した学習プログラム 7 案、地域情報マップを作成しました。それらの資料とワークショップで収

集めた意見を集約し、里山・農業、生活文化、共同作業・年中行事に焦点を当て、これらの営みに協働（お手伝い）できる試行プログラム作成を検討しました。

その構成内容は次の通りです。

背景と方向性	<p>①島内資源の保全再生のキーとなるフィールドとしての里山と農地</p> <p>②集落の伝統文化の担い手として、工芸品・郷土料理・菜園作りと島内女性の役割に着目</p> <p>③現在の観光シーズンは7～8月に集中、それ以外（特に11～4月）の期間のプログラムが必要</p> <p>④外部者が関われる島の営みの再生・元気作りにつながる活動構築（これまでの外部者＝観光客＝お客さん、ではなく、共に協働して取り組むことができる新たな外部者を新規開拓）</p>
テーマ案	<p>「栗島の恵みを生み出すおばあちゃんとの出会いとお手伝い」</p> <p>①島のおばあちゃんの知恵・・・島の農業・郷土料理</p> <p>②島の里山と畑と海の恵みのつながり・・・生物多様性、鳥獣害軽減、ミネラル供給機能「島の里山と畑は、海を耕す」</p> <p>③島人とのコミュニケーションと共同で育む集落行事と伝統文化</p>
意図・構成要素	<p>・プログラムの意図</p> <p>島内の里山・畑の維持管理は、山菜・農産物だけでなく、その独特の地質構造とあいまって、豊かな水を育み、海の恵みを作り出している。</p> <p>新たな保全型エコツーリズムとして、恵みを楽しむだけでなく、恵みを作り出すための島の生業・暮らし・日常生活を、おばあちゃん（おじいちゃん）のお手伝いを通して、貢献し体感するプログラム。あわせて文化伝承と恵み体験をセットする。島内の現在のニーズを踏まえて観光シーズンオフ中の取組みが主として構想する。</p> <p>・構成要素</p> <p>プログラム構成要素として①～③の組み合わせで構成</p> <p>①島のお手伝いプログラム</p> <p>畑の手入れ、里山の手入れ、山菜取り、収穫、冬囲いの手伝いなど集落共同作業への参加とコミュニケーション</p> <p>②伝承プログラム</p> <p>郷土料理の作り方伝承、工芸品作り伝承、伝統行事の手伝い・参加</p> <p>③島の恵み体験</p> <p>海の恵み体感（漁・わっぱ煮など既存の観光資源やプログラムの活用）</p>

以上を踏まえて、私たちが再び島を訪れる11月に実施可能な試行プログラム計画を、次の通り策定しました。

<p>プログラム1</p> <p>畑お手伝い（豆・大根など）</p>	<p>・各畑へ集合・説明・準備</p> <p>・お手伝い （豆収穫、大根収穫、大根の冷蔵庫作業、運搬作業）</p> <p>・後片付け</p>
------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------

プログラム2 郷土料理会（大根料理、煮物等）	<ul style="list-style-type: none"> ・ さっこい交流館へ集合・説明 ・ 調理・会食・後片付け
プログラム3 山（竹）仕事お手伝い、 テゴ編み体験	<ul style="list-style-type: none"> ・ 山仕事：枯れ竹整理→青竹伐採→箸作り・お椀作り ・ テゴ編みその他 <p>（資料館にて、道具の説明込みでの体験学習回の実施）</p>

（3）試行プログラムの実践と修正

1) 試行プログラム実践の概要
試行プログラムの実施に当たっては、図3のチラシを作成し、広報と募集をおこないました。学生5名、教員1名の他、首都圏より一般3名（子ども2名含む）、島内参加者10名程度の計20名程度の規模で実施しました。

当日はあいにく雨天となったため次のように内容を変更することとなりました。里山分野：竹林の管理作業を予定していたが雨天のため中止。農業分野：畑での作業を予定していたが内容を変更し、屋内におけるマメ選別作業をお手伝い。生活文化：テゴ編み、郷土料理教室を予定通り実施。また晴れ間を見てアジ釣り体験を行いました。

2) 試行プログラム実施結果

参加者からの体験記から試行実践内容の結果と検討内容について振り返ります。

①農業分野：マメの選別作業

・外部者参加の可能性と「一人娘」の現状

粟島には主力商品の1つである「一人娘」という大豆があります。この大豆栽培を理解すると同時に、外部者が作業に参加可能であることを確認するために、私たちは豆の選別のお手伝いをさせていただきました。この豆は、現地のおばあちゃんたちが味噌を作るために使用されているものです。さらに最近では、島内の中学生のキャリア教育の一環として、この大

粟島秋のお手伝いツアーの実施のお知らせ

大正大学では、今年夏より島の人たちと島外者で共に取り組むことで島の活性化につながるプログラムについて検討してまいりました。その成果を活用した秋のお手伝いプログラムを実施します。ご参加・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



■日時 11月14日（土）13:30～19:00 15日（日）9:00～11:00

■場所 島内の畑や里山（郷土料理教室はさっこい交流館）

■日程

- ・ 11月14日（土）＜1日目＞
 - 13:30 後場集合・移動
 - 14:00 **プログラム1 おばあちゃんのお手伝い（内浦・釜谷地区）**
・ 豆・大根収穫・運搬など
 - 16:30 **プログラム2 郷土料理講習会（さっこい交流館）**
・ 大根料理・煮物他、季節の島料理
 - 19:00 1日目終了
- ・ 11月15日（日）＜2日目＞
 - 9:00 資料館前集合
 - 9:15 **プログラム3 島伝統の竹林整備講習会（宮口）**
・ 草・細木刈・枯竹整理・竹伐採・運搬集積
 - てご編み講習会（資料館2階）**
・ てご編みによる小物類づくり
 - 11:00 終了・温泉

■持ち物など
畑仕事・山仕事に適した服装でご参加ください。
帽子・軍手・長靴・フードつきパーカーなど。

■問い合わせ・連絡先など
大正大学地域構想研究所（出川）TEL 03-5394-3048
E-mail s_degawa@mail.tais.ac.jp



図3：試行プログラムのチラシ

豆を利用した新たな製品の開発を行っています。おばあちゃんに教わりながら、現地の子どもたちと一緒に作業をしました。

・作業の進め方—地元の子どもたちも初体験の豆の選別—

はじめに、おばあちゃんが実際に選別をしている様子を全員で見ました。選別をしながら使える豆と使えない豆の特徴を教えてくださいました。現地の子どもたちですら、この作業をすることは初めてだったようで、みんなで話し合いをしながら作業を進めていきました。豆の量も非常に多く、直径 30 cmほどのざるに約 3 つ分ありました。基本的に傷がついてしまっている豆は使えないものなのですが、小さい傷であれば使えるとのことだったので、その線引きが非常に難しかったです。選別が終わり、おばあちゃんに確認してもらってもその中からまだまだ使える豆が出てきて、1 度や 2 度やっただけでは完璧にできない作業であることを実感しました。作業をしている最中は、子どもたちやおばあちゃんと話をしながら、また自分で判断できない豆は判断してもらいながら作業を進めていきました。

・お手伝いのためには事前学習が重要

今回は、収穫した豆の中でもごく一部を選別しましたが、実際はもっと多くの豆が収穫されています。体験させていただいた量だけでも多いなと感じましたが、これよりもっと多くの豆を各家庭のおばあちゃん、おじいちゃんが一人で作業をしているということを知ることができました。これはおばあちゃんたちの時間をそうとう奪ってしまっているのではないだろうかと考えました。反省点としては、まったく知識のない状態で手伝うことになってしまった点です。晴天であれば、

畑仕事の体験をした後に豆の選別のお手伝いをする予定でした。畑仕事の大変さも知る事ができれば、さらに良かったのではないかと思います。また、コミュニケーションをとる点でもあまりスムーズにいきませんでした。これは全体的な反省というよりは個人的な反省になってしまいましたが、大学生活の中でコミュニケーション能力を身につけておくことは、実際に現場に出た際に非常に重要になってくると感じました。



写真 7 : おばあちゃん (左) を囲んで豆の選別作業

・プログラム化に向けた課題—天候・能力・ニーズとのマッチング—

今後プロジェクトとして展開していくと考えると、作業としては小学生から 30 代前半くらいまで幅広い年代の人が参加できるものと考えられます。豆の選別のお手伝いだけをするのではなく、畑仕事から参加することによって、普段都会では体験することのできない作業をすることができ、さらに豆の選別という栗島ならではの作業も行うことができます。しかし、この作業は天候に大きく左右されてしまいます。天候に恵まれなければ行うことができないため、その点について考慮する必要があると感じました。

②生活文化分野：テゴ編み

・テゴ編みについて

栗島で昔から使っている物を入れるための道具です。各家庭にテゴを作る道具があり、手作りしていました。海で取った海藻を入れるのに使ったり、畑の収穫物を入れたり・・・。

今回の「てごあみ会」では、日常でバッグとして使用できるように工夫されたお洒落なものが沢山出来上がりました。テゴ編み作りではまず、テゴの前半部分の作成手順を教わります。その後各自で、教わったところまでテゴの作成を進め、前半部分が終了した人から、後半部分の作成方法を指導開始。後半部分を各自で作成して完成です。

・地元の人とのコミュニケーション～手作業で生み出されるコミュニケーション

自分たちにとっては慣れない作業を行うため、作業手順を覚えることができず苦労しました。何度もおばさんたちに聞きながら作業を進めていきましたが、なかなかはかどりませんでした。慣れない作業に加えて、手先が器用ではない男二人が作業をしていたため、何度も同じところでつまずき、少し進めてはやり直しを何度も繰り返す形となりました。そんな自分たちを見かねて、お母さんたちは何度も声をかけてくれました。自分たちも分からないことや、気になったことは積極的に聞きました。こちらから質問することで、作業手順以外の話を聞くことができました。都会の人とは違い、こちらから話しかけると嫌な顔を全くせずに話を聞いてくださいました。質問をしたり、声をかけることをためらうことなく、積極的に話しかけることがコミュニケーションをとる上で大変重要だと思いました。



写真8：てご編みの出来栄を確認する

・苦労・感動・反省・学んだこと～伝統工芸の伝承と継承～

テゴ編みでは、まず作業手順を覚えることに苦労しました。先述したように慣れない作業をするため、なかなかはかどりませんでした。その一方で、コミュニケーションをとることはそんなに苦労しませんでした。こちらから話しかけると快く対応してくだり優しい方たちだと感動しました。さらに、作業体験を行っているため、話題がないと困ることはありません。加えて、作業に集中し、真剣に取り組んでいれば、おばあさんたちの方から話かけてくれる。作業に集中することで、分からない所や、質問したいことも出てきます。まず、作業に集中する、そうすることでコミュニケーションも円滑に行えることができると学ぶことができました。教えてくれたお



写真9：てご編みの仲間たちと楽しく作業を

ばあさん方の殆どが、自分たちもできる人に教わりながらやっていると話していました。ボケ予防になるし、少し空いた時間にやることができるのがいいそうです。

こうした話をお聞きして、なんでもそうだが、物は必要とされないと衰退していくのだと感じました。しかし、環境に良い素材で作ることができる伝統工芸が廃れていってしまうのはもったいないと思いました。

・活動の意義を振り返って

テゴ編みに参加することの意義として、作り手の少なくなった伝統工芸品の継承支援や島の女性たちのコミュニケーションを促進させる役割といったものがあげられると思います。確かにテゴ編みは、体験としては非常に面白みがあり、島の伝統工芸の歴史などを学ぶ上では大変有意義な活動であると感じました。しかし、お手伝いプログラムの観点から考えると、足を引っ張っているところもあり、必ずしもお手伝いと言えないと考えられます。プログラム中での位置づけを再検討する必要があると感じました。

③生活文化分野：遊び・釣り

・アジ釣りから学ぶ現地での生活

郷土料理との結びつきを学び、島での遊びや日々の生活への理解を深めるために、豆の選別を一緒にお手伝いしてくれた子どもたちやそのお父さん方とアジ釣りの体験をしました。観光船乗り場としても活用されている堤防で釣りを行いました。使用した物は、普通の釣り竿と餌として小さなエビです。こちらは普段から子どもたちも行っている事だったので、今度は子どもたちが先生となって私たちに教えてくれました。

・釣りの方法—基本的なやり方と子どもたちの工夫—

1つの竿に4から5つほど釣り針が付いていて、そこに小エビを一つ一つ付けていきます。驚いたことは釣り糸を垂らすだけで、すぐに釣れてしまうことでした。私は、釣りは全く経験がなく、初心者だったので不安でいっぱいでした。しかしすぐ釣ることができたので、みんなと同じように楽しむことができました。エサの取り付け方や釣り糸を垂らした後の動かし方などを子どもたちに教わりながら時間も忘れるほど没頭してしまいました。現地の方の釣りの工夫としては、針にエサを付けるのではなく、直接海に撒いていました。このような方法でもアジが釣れたので改めて自然豊かな土地であることを認識することができました。

・学んだこと—小さな魅力でも見逃さないことの大切さ—

アジ釣りは季節ごとの作業というよりは、子どもたちの遊びの延長であるような印象を受けました。現地の人々にとっては普段からしている遊びであっても、東京に住んでいる我々にとっては非常に魅力的な体験であると感じました。このように、ちょっとしたことで



写真 10：地元の子もたちとアジ釣り。30 尾以上もの釣果があり、島の海の豊かさを実感した

も島外の人々にアピールするための魅力となることが改めてわかりました。小さなことでもその土地の魅力であるため、見逃さないことがプロジェクト成功への鍵になるのではないのでしょうか。

・今後の展開について—釣り体験のメリットと今後やってみたいこと・考えること—

先ほども述べたように、アジ釣りは釣り初心者の私でも簡単に手軽に楽しめるものでした。また、現地の子どもたちとすぐ打ち解けることもできたため、都会と島の交流という点では非常に効果的なものではないかと感じることができました。今回は海釣りのみでしたが、川釣りなども計画し体験することができればさらに良いものとなるでしょう。ただこちらでも、畑仕事の体験と同様に雨が降ってしまうと難しいため、雨天時の対策を考えなければなりません。

④生活文化分野：郷土料理教室

・料理教室の意義

地域資源を利用した食文化の魅力・島の生活文化を学ぶことを掲げて、島の日常食としての郷土料理を地元のお母さん・お父さん方、子ども達と共につくり、会食をおこないました。



写真 11：島の女性たちから郷土料理を学ぶ

・メニューについて

作った料理メニューの概要を次に掲載します。

【アジフライ】

アジ(鯷)をひらき状態または3枚におろして溶き卵に漬け、パン粉をまぶして油で揚げて作る揚げ物料理です。



写真 12：アジフライ

【アジのナメロウ】

新鮮なアジだからこそ出来る料理。地元のお父さんに見事な庖丁捌きを見せてもらいました。



写真 13 : アジのナメロウ

【イモダコ】 タコとジャガイモを、砂糖、醤油、酒、水で甘じょっぱく煮ればいいらしい。



写真 14 : イモダコ

【漬物（大根）】

地元の大根で地元の人がつけた漬物



写真 15 : 大根の漬物

【タコの刺身】

調理のコツは、庖丁で切れ目をたくさん入れること。醤油のアジがしみこみやすくなると共に食感もよくなる。



写真 16 : タコの刺身

【サツマイモの天ぷら】

粟島のイモ類は土質のせい、イモ類が大変おいしく育つ。ほくほくしたサツマイモをからりと揚げました。



写真 17 : サツマイモの天ぷら

【汁もの】

この時期に取れる島の野菜などを入れて魚料理に合う汁物を作りました。



写真 18 : 汁物

・魚さばきを直に教わる—料理から生まれるコミュニケーション—

魚をさばくのは男子学生3人と島の子どもたちが担当しました。男子大学生3人のうち2人が魚をさばいたことがなく、島の方にさばき方から教わりました。

話す内容がないという状況はなく、料理中のほとんどの時間をさばき方や料理の仕方を教わっていました。そのため、コミュニケーションの取り方で困ることはありませんでした。魚をさばくことに慣れてきたら、島の伝統料理の話を知ったりすることができました。一つの作業を何人かで共有することで、親近感がわき、会話も弾みました。

魚をさばいたことがない人がさばくと、どうしても歪な形になったり、失敗したりします。失敗することで、やり方を教えたり、笑ったりしながら進めることを行いやすくなりました。下手な人と一緒に作業をするとより盛り上がり、話が弾むことが分かりました。



写真 19：タコの下ごしらえの仕方を学ぶ



写真 20：地元の子どもたちも慣れた手つきで料理のお手伝い

・感動—島の教育力—

普段からやっているからだということですが、島の子どもたちが魚やタコをさばくことに何ら抵抗なくさばいていたことに感心しました。生の食材に触れ、自分で採ってきたものを自分で調理することで命の大切さを知ることにはもちろんですが、料理のすることの大変さも知ることができます。大変さを理解することで、感謝の気持ちも強くなるのではないのでしょうか。もう一つ子どもたちを見て感心したことがあります。自分の皿にのった食べ物を残す子が一人もいなかったことです。野菜も魚もすべてきれいに食べきっていました。自然と近い環境が食育に与える影響力を感じました。

・プログラム体系化の必要性

料理教室ということで、カリキュラムほどしっかりしたものでは無いにせよ、指導手順や指導者の役割分担などはあった方がよいと思いました。ただ固定した枠組みを作り、それに当てはめていくことは、プログラムの性質上、島の雰囲気や風土になじまない気がします。しかし、ある程度体系化させ進行していかなければ、この体験を行う意味や、こちらが伝えたい思いも伝わらないという現象が起こりうるのではないかと思いました。

3) モデルプログラム作成に向けた修正・課題点の抽出

試行プログラムの実践の結果、モデルプログラムの作成に向けて、次のような修正・課題の検討が必要であることが明らかとなりました。

①雨天時の対応策について

本プログラムが想定している10月～6月までの期間中は、この地域において特に天候が悪くなる日が多い。そのため、雨天時の代替プログラムをいかに確保するかが重要であるといえます。今回の試行プログラムでは、荒天のため特に里山・農業分野の活動を縮小せざるを得なかった。プログラム全体のバランスを考えながら雨天時でも実施可能なメニューの検討が必要です。

②お手伝いと参加・体験の区分を一島外者のかかわり方

本プログラムは、島民と島外者による協働の島作りを志向する中で、おばあちゃん・おじいちゃんのお手伝いを通じて、島づくりに寄与していこうという意図があります。しかし実際に試行プログラムを実施した結果、お手伝いというよりは、体験・参加といった観光的要素が強い活動メニューもあることが分かりました。例えばマメの選別作業はお手伝いとしての要素が強い一方で、アジ釣りやテゴ編みなどの活動は参加・体験などの要素が大きい。

今回は悪天候のため里山や野外での農作業が出来なかったため明らかになっていないところもありますが、プログラムの活動実態に合わせてお手伝いと参加・体験との類型区別の明確化が必要であると考えられます。

③役割・機能の明確化—島民指導者のかかわり方

島の暮らし・仕事など、本来島外者の参加を想定していない活動を基盤とした本プログラムは、島民にとっては当たり前の日常生活に属するものです。したがってどのように外部者に対して取り組みを解説したり注意点を説明したりするか意識化し検討する必要があると考えられます。例えば、今回のプログラムでは郷土料理等で調理過程において効果的なガイダンスがあるとより一層理解が進んだのではないかと感想があったが、そういったガイダンスを可能とする島民のためのマニュアルの整備も必要ではないかと考えられます。

そのため外部者と共に効果的に活動を実践していくための島民指導者向けの手引書の作成を検討する必要があると考えられます。

④準備の簡易化、生活時間に合わせた実施方策

島の日常の暮らしと生業へのお手伝いを掲げた本プログラムですが、外部者を受け入れるためにかえって負担が増えるのではないかと危惧も聞かれました。試行プログラムにおいても、島の生活時間に配慮したプログラム実施時間の検討や活動フィールドでの準備の簡素化、あるいはお手伝いに適した活動メニューの精選といった課題が浮き彫りになりました。

今後も、島の日常生活の実態にさらに寄り添うことで、準備を簡素化したり生活時間に合わせた実施方策を検討する必要があると考えられます。このことは将来的に本プログラムを島民主体の自主的運営で取組むことを見据える上でも重要な検討事項であると考えられます。

(4) 首都圏におけるプレゼンテーション・プロモーション活動

試行プログラムの実施と前後して、豊島区公共施設、大正大学イベント、離島物産展等において、本調査・研究成果をプレゼンテーションするとともに、栗島の産品やサービスおよび構想中のプログラムのプロモーションにつなげるためのPR活動を行いました。

1) 豊島区公共施設におけるプレゼンテーション

豊島区生涯学習施設「みらい館大明」の10周年記念文化祭において、展示・プレゼンテーションをおこないました。住民からは都市部とは異なる栗島の自然や生活文化の暮らしや日常的営みについて素朴な関心が寄せられました。またプログラムで具体的にどのような体験が出来るのか、その体験が島の保全や生業にどのようなかわりがあるのか興味をもたれた来場者もいました。

海の美しさや豊かさをぜひ体験したいという来場者が多く、プログラムの設定に当たってはこうした海分野の取り組みとの連携をどう構築するかが鍵であるあらためて考えさせられました。



写真 21：大明での展示発表

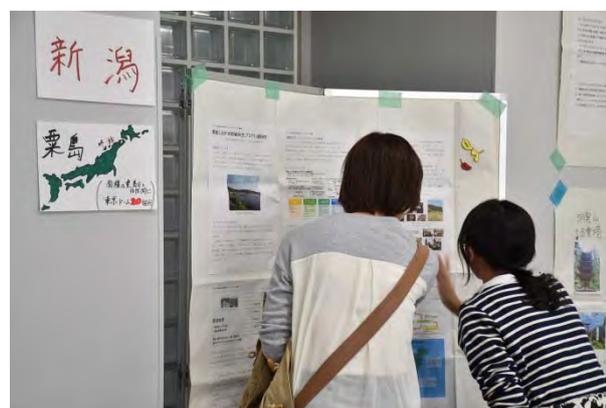


写真 22：大正大学鴨台祭での展示に見入る来場者

2) 大正大学イベントにおけるプレゼンテーション

大正大学大学祭「鴨台祭」において展示・プレゼンテーションをおこなった。来場者からは栗島への地域的関心だけでなく、本研究が島づくりに具体的にどのような効果を持っているのか、また構築したプログラムをどのように運営していくのか、都市部とどのようなかわりをもたせることが出来るかなど、研究・調査の意義と内容に関する情報交換・意見交換がおこなわれる場面が見られました。

島づくりに関係する本研究・調査の立位置を常に意識していくことは、プログラムの運営主体をどのように位置づけ、育てていくかということにも関係することであり、その意味でも貴重な意見交換が出来たと受け止めています。

3) 離島物産展におけるPR 池袋で開催された離島物産展「アイランダー2016」において、調査チームの学生を派遣し、栗島物産やツーリズムのPR・販売促進のお手伝いをしました。また、本研究調査で作成したモデルプログラムのPRをおこないました。栗島をテーマにするツーリズム人気投票「あわしま満喫ツアー人気投票」も実施され、本研究で作成したモデルプログラム「栗島の恵みを生み出すお手伝いツアー」は第3位となりました。

人気投票ではアンケートでは次のような意見がありました。()内は人数。

- ・島ならではの企画 (2)
- ・島民との交流がよい (1)
- ・園芸はリハビリによい (1)
- ・生の魅力に触れ文化が豊かになる (1)
- ・大人も子どもも楽しめる (1)
- ・このツアーにマグロ捌きや漁協のお仕事見学を組み込みたい (1)
- ・料理と祭りが良い (1)

以上、首都圏でのプレゼンテーション活動を通じて得られた都市住民側の意見や反響等を集約し、モデルプログラムをさらに検討し反映させ完成させていくこととしました。



写真 23：アイランダーでは学生が PR 活動を手伝った

(5) モデルプログラム作成と実施体制づくりの検討

現地調査、住民とのワークショップ、試行プログラムの実践、首都圏でのプレゼンテーション活動等、一連の取り組みによって得られた情報を基にモデルプログラムを作成し、その実施体制と事業化に向けたプロセスについて検討を行いました。

1) モデルプログラムの作成
島民・島外者協働の「お手伝い」を中心的なコンセプトとして、次のテーマ・構成内容による年間運営のモデルプログラムを作成しました。以下、作成チラシより抜粋し掲載。

①テーマ

「粟島の恵みを生み出すお手伝いツアー-粟島の魅力は「夏」だけじゃない。島のおばあちゃん・おじいちゃんたちと共に「秋」・「冬」・「春」の魅力も体験しませんか?」

粟島の恵みを生み出すお手伝いツアー

粟島の魅力は「夏」だけじゃない。
島のおばあちゃん・おじいちゃんたちと共に「秋」・「冬」・「春」の魅力も体験しませんか?



美しい海に囲まれた粟島。この海は、里山や畑でろ過されたミネラル豊かな島の沢水によって育まれています。まさに粟島のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、長年にわたって里山の手入れを行い、畑を耕すことで、この美しい海を耕してきたといえます。
このツアーは、島の人たちとともに里山、畑、共同作業、各種手仕事など島伝統の暮らしのお手伝いを通じて、人と自然を元気にしていくプログラムです。

- ・畑
粟島の畑作業は素朴な道具を用いてきめ細かに行う伝統農法です。おばあちゃんともう海が見えるあかぜの気持ちいい段々畑で、伝承野駝の栽培など季節ごとの農作業を楽しみます。
- ・里山
粟島の里山は山菜の宝庫。春は数多くの山菜採りが楽しめます。秋は島の伝統産業だった真竹(マダケ)の手入れ。伝統的な方法によって竹林を整備し豊かな里山を再生させます。
- ・伝統行事
島には100近い年中行事が存在しています。その中から島外の方も一緒に取り組める年中行事を5つ厳選。お手伝いプログラムと共に島の人との交流を深めます。

- ・共同作業
島の人たちは力を合わせて生業の道を守ってきました。海苔採りのための磯道普請などのお手伝いと交流を通じて、粟島を生きる暮らしの文化に触れます。
- ・郷土料理と手仕事
畑や里山の恵みを料理に。島のおばあちゃんたちの手料理を一細く学び飲食します。また、カラなどの島の植物を使った島伝統の「テコ織み」なども体験します。

スケジュール

<1日目>
昼：粟島港到着 昼食とレクチャー
午後(プログラム1)
里山、畑、共同作業から季節に応じて選択
※雨天時はテコ織み作り
夕(プログラム2)
郷土料理教室・会食

<2日目>
午前(プログラム3)
里山、畑、共同作業から季節に応じて選択
※雨天時はテコ織み作り
乙畑の湯(温泉)入浴
昼：昼食・出発準備
午後：粟島港出港

持ち物・服装等
野外活動に適した服装(長袖長ズボン)、エプロン(郷土料理教室)帽子、タオル、入浴道具等

図 4：お手伝いプログラムの PR チラシ

②プログラム趣旨

美しい海に囲まれた粟島。この海は、里山や畑でろ過されたミネラル豊かな島の沢水によって育まれています。まさに粟島のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、長年にわたって里山の手入れを行い、畑を耕すことで、この美しい海を耕してきたといえます。

このツアーは、島の人たちとともに里山、畑、共同作業、各種手仕事など島伝統の暮らしのお手伝いを通じて、人と自然を元気にしていくプログラムです。

③プログラム構成内容

・畑

粟島の畑作業は素朴な道具を用いて行う伝統農法です。おばあちゃんとともに海が見えるしおかぜの気持ちいい段々畑で、伝承野菜の栽培など季節ごとの農作業を楽しみます

・里山

粟島の里山は山菜の宝庫。春は数多くの山菜採りが楽しめます。秋は島の伝統産業だった真竹（マダケ）の手入れ。伝統的方法によって竹林を整備し豊かな里山を再生させます。

・伝統行事

島には 100 近い年中行事が存在しています。その中から島外の方も一緒に取組める年中行事を 5 つ厳選。お手伝いプログラムと共に島の人との交流を深めます。

・共同作業

島の人たちは力を合わせて生業の道を守ってきました。海苔採りのための磯道普請などのお手伝いと交流を通じて、粟島を生きる暮らしの文化に触れます。

・郷土料理と手仕事

畑や里山の恵みを料理に。島のおばあちゃんたちの手料理と一緒に学び試食をします。また、カツラなどの島の植物を使った島伝統のかご「テゴ編み」なども体験します。

・島外者もお手伝いできる行事

乗り初め漁神楽（1月11日）漁師の祭り

七夕（8月6日）舟を流す

盆踊り（8月13・14日）事前練習参加者は、太鼓・うたいも可能

釜谷六所神社祭礼（10月8日）竹灯籠作り

八所神社祭礼（10月26・27日）灯籠やのぼりを立てたり、神輿を担ぐ

④モデルスケジュール等

・1日目

昼：粟島港到着 昼食とレクチャー

午後：（プログラム1）里山、畑、共同作業から季節に応じて選択※雨天時はテゴ編み作り

夕：（プログラム2）郷土料理教室・会食

・2日目

午前：（プログラム3）里山、畑、共同作業から季節に応じて選択※雨天時はテゴ編み作り

乙姫の湯（温泉）入浴

昼：昼食・出発準備

午後：粟島港出港

・持ち物・服装等 野外活動に適した服装（長袖長ズボン）、エプロン（郷土料理教室）帽子、タオル、入浴道具等

2) 実施体制と事業化へ向けた検討

①実施体制－島民と島外者が協働する仕組みづくりの構築－

モデルプログラムの実施のためには、受け入れ先である島民側の組織体制整備が必要です。島の恒常的な人手不足の事情を考慮に入れると、新規に組織を立ち上げるというよりは既存組織を活かしながら、住民の日常生活の中で自然と取組める方策が求められます。本検討では、プログラムを団体受け入れのものと個人受け入れのもの2つに区分し、組織的に対応するものと民宿等で個別に対応するものとに分類し対応する案など検討を行いました。今後、行政、自治会、観光協会、各種島民団体などの関連団体との効果的な情報交換と実施に向けた連携体制の構築が求められます。

また、本プログラムは事前の学習・情報提供が重要であるという性質をもっているため都市部側でのPR・プロモーション及び事前学習活動等を提供できる組織団体の育成が不可欠であると考えられます。粟島が今後プログラムを運営するにあたって都市部からの支援体制を検討した結果、本研究にかかわった学生・教員を中心に「離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会」を結成しました。また、起業志向を持つ学生を中心に本取り組みを支えることに関連した事業型NPO及びベンチャービジネスの立ち上げ準備もおこなっています。

②事業化に向けたプロセス取り上げる季節・分野ごとの試行実践の必要性

試行プログラムでは11月中旬の時期にわずかな活動しか行えなかったため、事業化に向けた実施データが不足している状況です。他の季節や分野ごとの試行実践が必要不可欠であり、十分な試行結果を踏まえて総合的にモデルプログラムの事業化に向けたプロセスを検討していく必要があると考えられます。

4. 調査研究の成果について

今回の研究調査活動により、漁業や観光等を中心とする従来の地域づくりの視点に加えて、次の新たな視点を盛り込むことができたことが大きな成果といえます。

(1) 里山・農業・生活文化への着眼

これまで、粟島浦村において、特に島外者の受け入れを前提とした地域振興方策は、観光分野や漁業分野（海資源の活用）といった分野を主とするものでした。

本研究では、島民と島外者が協働し共に取組める島づくり活動を創出するという視点から調査を行うことで、これまであまり着目されてこなかった島の里山や農業、生活文化分野での協働活動創出の可能性を提示することができました。

これらの分野は観光・漁業などの島の主力産業を支える重要な下部構造だといえます。例えば、観光・漁業の貴重な資源である島周辺海域の環境は、島内の里山・農地の健全な保全と密接な関係があります。そして里山・農地環境は島民の日常的生活文化の営みによって保全・維持されているものです。しかし近年の急速な人口減によりこれらの営みを継続していくことが困難な状況となっています。

以上を踏まえて、里山・農業・生活文化をテーマとして、島外者参加による協働活動を促進し、その維持・保全・継承と地域活性化につなげるための具体的なプログラムを提示することができました。

(2) 高齢者を軸とした営みに光を当てる

里山・農業・生活文化は、現在島の高齢者によって主として担われています。今回の取組みにより、島外者との協働という側面からあらためて島の高齢者の暮らしと営みに光を当てることができました。「島のお手伝い」をテーマに掲げて、高齢者と協働することで島の恒常的な課題となっている人手不足を補完するとともに、伝統的な知恵と技術を継承し再生・活性化へ導くための道筋を提示することができました。

(3) 観光の枠を超えた都市部住民の参加協働・連携方策の検討

従来、粟島浦村では「島外者」＝「観光客」としての位置付けがほとんどでした。本研究により、観光という枠組みを超えた新たな島づくりの参加協働の形態を構想することができました。また、首都圏での複数にわたるプレゼンテーション・プロモーション活動を通じて、都市側のニーズとのマッチングについても検討できたことも大きな成果であると考えられます。さらに本調査参加学生を中心にして「離島と都市を結ぶ地域づくり学習研究会」を立ち上げるなどの新たな動きも展開しています。

(4) 人材育成・担い手育成につながる新たな事業展開の可能性

モデルプログラムとして「島のお手伝い」を掲げることで、島内外の新たな人材・担い手育成の方向性を提示することができました。島の自然・文化・伝統を踏まえながら、その維持・保全・継承、さらに新たな交流ビジネス事業（島の教育・学習機能を活かしたツーリズム等）の可能性を示唆することができました。これらは島の日常の暮らしの強みを活用するものであり、島外者にとって将来的な移住・定住のインセンティブにつなげることが期待できると考えています。

5. まとめ - 連携協働を促進し地域の価値をつなぐ学びのために -

粟島浦村での調査研究では、住民とのフィールドワークを通じて、島民と島外者がともに協働し島づくりに寄与するための取組として、里山・農業・生活文化に光を当て、高齢者を軸に「島のお手伝い」という具体的なキーワードを引き出しプログラム化することができました。今後は、観光・漁業分野等既存の島の活動との効果的な連携の仕組みづくりを見据えながら、本研究で作成したコンテンツを具体的に実践していくためのさらなる試行の積み重ねと事業化に向けたプロセスの構築が求められます。

今後とも粟島の貴重な自然・文化・伝統、そして人と人をつなぐための挑戦を続けていきたいと考えています。それは次世代に向けて地方地域の価値を再発見・再創出する営みであるとともに、都市地域側の課題や暮らしの見直しとも響きあうものだからです。私たちのフィールドでの学びが地方と都市をつなぎ、地域の価値を見出し課題を解決することの一端を担うことができればと願っています。

おわりに - 課題解決型学習を超えて、地域に寄り添い、学び、創る実践を -

幅野裕敬

・個人的次元 - キャリア教育実践と社会教育・生涯学習論の交差 -

これまで社会教育・生涯学習に直接かかわりのなかった私ですが、縁あって本冊子の編集にかかわらせていただき、また締め言葉の寄稿することになりました。このこと自体が社会教育・生涯学習論の間口の広さを感じているところです。

私は、本報告第8章で取り上げた栗島しおかせ地域共生プログラムの構築研究（以下、栗島プログラム）に関わらせていただきました。元来、私は、教育NPOを設立し、人材育成を含む、キャリア教育を実践したいと考えていました。そのためのNPO活動・事業の内容や運営方針を決めているころ、本研究の担当教員である出川真也先生と出会いました。NPOの活動事業内容や運営方針に関して相談を重ねていくうちに、私自身が行おうとしている人材育成やキャリア教育に、社会教育・生涯学習が参考になるのではないかと考えました。

このことがきっかけで当初、自己の活動とは直接関係はなかったものの栗島プログラムに参加させていただくことになったわけです。私にとって大変楽しい体験となりました（写真参照）。奇しくも来年度以降はこの栗島プログラムが栗島のキャリア教育活動とも様々な形で関係しそうだとのこと。社会教育・生涯学習がまさに様々な領域へと展開する入り口の役割を果たすものであるということを実感させていただく貴重な経験となりました。



写真：栗島の伝統民具「てご」編み体験で、戯れる筆者（左）

・各地の学習活動から考えること - フィールド報告の振り返り -

さて、本冊子の内容は、地域づくりの社会教育・生涯学習を掲げて、全国各地で受講学生が意欲的にそしてやや実験的に様々な挑戦を試みたものと言えるでしょう。喜びと悩み、驚きと感動が学生目線から赤裸々に語られていることから今後続く後輩達にとっても大変興味深い内容となっているのではないのでしょうか。以下に簡単ですが、振り返りの意味もこめて読後感想を述べてみたいと思います。

生涯学習施設実習講座のメンバーが事前研修として取り組んだ秦野上地区の地域計画づくりの取組（1章）では、住民と共に調べ、考え、時に新しい要素を地域外から取り入れて検討するといったファシリテーションの基本を実践しました。地域を考えるための相互学習をいかに促進していくか、共有できる地域状況の見える化をどのように図るかといった、調査の基本手法としても興味深い視点が打ち出されているものと思います。

山本（2章）は、ニーズというものは、「把握」するだけでなく、「作っていくもの」という視点を打ち出していることが新鮮です。社会教育・生涯学習の実践が、住民ニーズに単にサービス提供という形で応じるだけにとどまらず、求められるニーズを創出し社会的変革をも志向する積極的な役割を担うものであることを生涯学習施設の現場から見事に引き出

しているものとして注目されます。この意味で小池（3章）は、参加者の積極性の創出という点で山本と通底するものがあります。地域の生涯学習活動ではなにより参加者の積極性が重要であり、意欲的な参加者が増えるような取り組みを行っていくこと、雰囲気を作っていくことが大事だということが講座や文化祭といった地域学習活動の中で具体的に引き出されています。

土屋（4章）は、都会の幼稚園や保育園で、大地がやっていることが少しでもできるようになれば、子どもたちの可能性を広げていくことが可能になるだろうということを考えさせられます。都会で行うためには、どのようなハードルがあり、どのような準備が必要なのかを考えていくことが重要です。そのためにも本稿で触れられている通り今後都市地域と地方地域を教育の相互交流が求められるのではないかと思います。

内田（5章）は、シニア層の取組にスポットを当てたわけですが、地域で活動するにあたり、コーディネーターとしての仕事で最も重要なことの一つとして、地域住民の合意形成をどう形成していくか、そのための学びのプロセスをいかに構築していくかといった点で、「おやじたち」の言葉から把握している点で興味深いものと言えるでしょう。

土方（6章）や佐原（7章）は、特に実習学生として現場に入って学ぶ上で、地域の方とのコミュニケーションと信頼関係の構築が欠かせないことが実感される内容です。外部者が、地域に入っていくにあたり、地域に対する作法やある種の謙虚さ、そして現場の思いと自分の志向性とのギャップなど直面した悩みが率直に語られています。実習そのものは当初の想定していた成果を収められなかったものの、それに代わる社会教育・生涯学習のより本質的な知見と実感を得ることができたのではないかと感じられます。

社会教育・生涯学習講座を中心に多様な分野の学生と取り組んだ粟島プロジェクト（8章）では、地域の力を生み出していくために、地域住民と共に行った調査や試行実践（これらも地域学習活動といえるものでしょう）を積み重ねることの重要性が分かります。本プロジェクトの地域の学習活動により従来島で着目されなかった要素に光が当てられ、新たな活動や生業への展開の萌芽を見ることになるわけです。ここにこそ地域づくりの社会教育・生涯学習の真骨頂があるのではないかと思います。

・地域参加する上で大切なこと - 寄り添い、リスペクトすることから始まる学び -

フィールドワークで最も重要なことは、第7章で佐原が言うように、外部者としての目線の違いを意識しながらも地域に「寄り添うこと」ではないでしょうか。地域を活性化しよう、とか、地域に貢献しようと考え始めるとき、その地域の課題を発見することから始めがちです。しかし、地域に寄り添うことを忘れて考えた外部目線だけの思いつきの「課題」は、地域の人にとって課題だと考えていない場合があります。地域で課題だと思っていないものを外の価値観だけで課題だと高飛車に決めつけることは的外れであり、時に高圧的で地域を抑圧したり地域の力を奪うものとなる可能性さえあると思われます。課題を見つけ、地域のあり方を変えていくことだけが、地域創生のすべてではないのではないのでしょうか。

もちろん課題発見から解決へ向けたプロセスを意識して論理的思考を持つことが大切なことは言うまでもありません。しかし、まずいかに地域に寄り添えるか、コミットできるか、そこに専念することの方が重要ではないのでしょうか。実習の短い期間で地域に実際に寄り添い共に何がしかの取組を実践することは困難なことです。しかし、そのことで地域の価値

を見出すことができ、そのリスペクトの上に立つことで地域の課題も自然と見えてくるようになるのではないのでしょうか。その時初めて地域の方々が抱えている課題が会話の中でこぼしていってくれるようになるかもしれません。本書は全体を通じて、地域社会を創る社会教育・生涯学習に携わる者としてまず地域に寄り添う努力が大切であるということを物語っているように思えます。

・学生としてメッセージと期待 - フィールドでの学びと感動体験を -

今後地域の学びにかかわるフィールドワークにチャレンジしようとする学生たちにとって本書は、事前の準備からフィールド先での実践（現場で直面する悩みの数々を含む）、戻ってからの取りまとめ方法について、参考になる知見の数々が具体的に提示されています。これらを把握しておくことで、フィールド先で学べるものがより増えることと思います。先輩方の失敗例（というよりは悩み苦闘した事績といったほうが適切でしょう）や成功例を踏まえ、ぜひともフィールドで充実した学びを行い、地域の方々との感動を生み出してもらいたいと願っています。

地域づくり学習のフィールドワーク手引き

-平成 27 年度生涯学習施設実習報告-

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

発 行 大正大学社会教育主事課程

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

Tel.03 (3918) 7311 (代表)

印 刷